

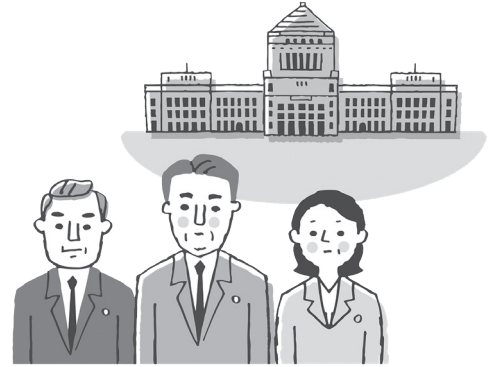


政治がわかる！せとけん政治塾 ⑦

国産ワクチン開発を急げ！ —もっと知りたいワクチンのこと

この箇所はダビデの祈りです。この国の政治を司る人々がこのダビデのような祈りと誠を神に捧げることがとても大事なことだと思えます。引き続き新型コロナウイルス感染症対策は、いよいよ有効なワクチンを、いかに早く求める国民に提供することができるといいう段階に入っています。

「わが神、主よ。どうか、あなたの御手を、私と私の一家に下してください。あなたの民は、疫病に渡さないでください。」（1歴代二十一・17）



各国のワクチン接種回数

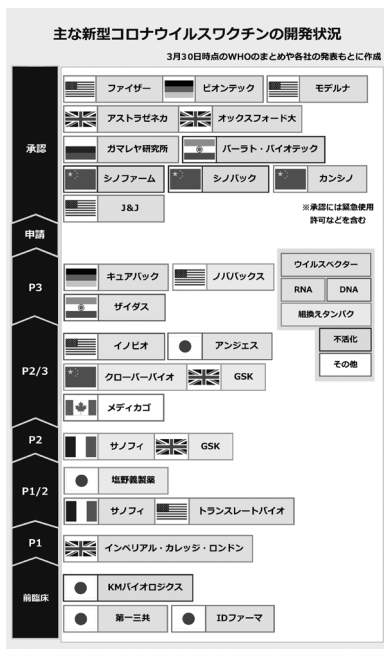
国産ワクチン開発に成功した米国や英国などでは、国産開発ワクチンの量産化によって、まず、国産ワクチンを自国民に急ピッチで接種しており、人口一〇〇人当たりのワクチン接種回数は、四月九日現在で米国が五一・七回、英国が五六・一回でした。これに対し、同時期にファイザー社製ワクチンのみを認可し、輸



瀬戸健一郎

英国国立エセックス大学政治理論修士過程終了／獨協大学法学部卒／衆議院議員 山川ゆりこ（妻）事務所長／日本マルタ友好協会会長／（一社）日本 CBMC 副理事長／元・草加市議会議員（6期）～議員団長、議長、監査委員、全国市議会議長会評議員等歴任／1981年米国聖公会で受洗／草加神召キリスト教会所属／信仰と学問的知識及び30年余の政治経験を活かし、日本を変え、世界に平和をつくる活動を夫婦で展開している。

入ワクチンに頼らざるを得ない日本では、一・二回でした。国産開発ワクチンの重要さはここにも明確に表れています。その他の国で特筆すべきことは、ダビデ王を歴史に刻むイスラエルが一・二・五回で世界第一位。これにアラブ首長国連邦（UAE）が八九・一回で続いているのに対して、ワクチン外交で無償提供も含めてワクチン供給国である中国は一〇・七回、ロシアが九・〇回、QUAD（日



世界のコロナワクチン開発状況

米豪印の4か国協議)の枠組みでワクチン供給を担うインドでも六・六回に留まっていることです。

特に中国は、接種累計回数が四月九日現在で世界トップの一億七・四一・五万回だった米国に次ぐ一億四九〇七・一万回の実績があるものの、中国やインドは桁違いに大きな人口を抱えているために、国民への接種率がなかなか伸びません。確かに、イスラエルやアラブ首長国連邦は人口規模が小さいというのは事実ですが、冒頭のダビデの祈りに照らせば、自国民にどれほどワ

高く評価されている日本の創薬力

ワクチンが行き渡っているかという数値には、大きな意味がありそうです。

聖書に疫病と称される感染症対策には、大きく二つの分野があります。ひとつは社会的介入。そしてもうひとつがワクチン開発です。社会的介入というのは、感染者の選別と隔離が基本で、その他にも都市封鎖や緊急事態宣言、三密の回避やマスク着用の義務化など、幅広い行政権力による規制や要請などの介入が含まれます。これに加えて、特に日本においては小石川療養所に象徴されるように、歴史的に国民すべてに開かれた医療サービスが提

供されてきましたし、国民や社会の中に高い公衆衛生に対する意識や環境が維持されてきました。こういった条件が重大な感染症の被害を最低限度に封じ込める効果を産み出すようです。しかし、感染症そのものを無力化して、根絶するためには、どうしても有効なワクチン開発が不可欠です。

例えば、紀元前から致死率の高い疫病として知られていた天然痘については、WHOが一九八〇年に根絶を宣言しましたが、日本でも江戸時代から天然痘との闘いには果敢に取り組んできました。まず社会的介入によつて感染拡大を抑制し、ワクチンが出来たら、これを接種することを法律で義務化して、日本人の特性に合わせて改良ワクチンの開発にも着手。日本にはかつてワクチン大国と称された時代があったのです。その頃、蓄積された日本の既存ワクチンの改良技術や感染症学の成果が、今でも世界から高く評価されて

先端の基礎研究を疎かにする政府の責任 リスクに足踏みする政府

いる日本の「創薬力」やそのポテンシャルの根底にあります。

ではなぜ、日本で今回の新型コロナウイルス感染症に有効なワクチンの開発は遅れをとってしまったのでしょうか。これには幾つかの理由が考えられます。ひとつはワクチン開発には副反応というリスクがあるということ。かつてツベルクリン反応検査やBCGの小中学校などでの集団接種で、注射針を使いまわしていたことが原因でB型肝炎に感染する事例があり、これを政府は今でも補償しています。一方、子宮頸ガンワクチンについては、ワクチン自体の重篤な副反応を訴える人々の主張を政府が認めず、それでも因果関係が否定できないことを理由に同ワクチンの接種の推奨は取り消されました。ワクチン開発の危険性や

重篤な副反応に対して、ワクチンを認可する政府が責任を取らず、補償もしないという空気の中では、国産ワクチン開発は進みません。

もうひとつの国産ワクチン開発が遅れる大きな原因は、平時からの基礎研究に取り組み研究機関や研究資金が乏しいことです。今回、世界中で接種が始まったワクチンには幾つかの異なる種類があります。その主流となっているのが、「組み換えたんぱくワクチン」と呼ばれるものです。これには遺伝子組み換え技術が使われていて、ウイルスのたんぱく質の一部を人工的に作って投与し、体内でウイルスを攻撃する抗体をつくるメカニズム。その最先端の基礎研究を平時から支える体制が脆弱であることが指摘されています。

るだろうと述べていました。今回、ファイザー社製のワクチンなど複数のワクチンの開発を成功させた米国では、約一兆円もの国家予算を投入し、ワクチンによるリスクを政府が補償する体制を組んできたと報じられてきましたが、基礎研究予算が百億、千億といった巨費ではないことに私は驚きました。逆に、基礎研究が充実していなければ、一兆円かけても、一年でワクチン開発に成功することはなかったのかもしれない。

基礎研究は防災対策と同じ

つまりここで言えることは、疫病はいつ起こるか分らないという点とです。だから聖書の中では天変地異と同じように、疫病は神の懲らしめであるという文脈も成り立つわけです。つまり、ワクチン開発とそのための基礎研究は、大震災や津波に備える防災対策と同様の危機管理意識をもって、平時から取り組むべき

衆議院外務委員会で「ワクチン外交」と「国産ワクチン開発」の重要性を訴える山川ゆりこ



課題だということですが。さらに、数々の既に成果となっている基礎研究分野の製品や原材料にもパテント（著作権）があつて、これらの製薬原料を日ごろから調達できるルートを外交交渉などで確保していなければ、海外で開発されたワクチンを日本国内で製造することさえ出来ません。

山川ゆりこ代議士（妻）は、主

のお計らいで衆議院外務委員会と厚生労働委員会に同時に所属しているため、日本が世界人類に「人間の安全保障」（武力によらない安全保障・人道支援）を展開していくならば、いち早く国産ワクチン開発・製造が実現できる体制を作るべきであり、そのためには世界の研究機関と連携し、原材料を相互調達できるように外交チャンネルも持つべきだと、国会で政府に対応を求め続けています。米国のBARRDA（米生物医学先端研究開発局）の日本版を創設し、感染症学に光をあて、治療薬と同様に予防薬にもビジネスモデルを展開していけるような、政府の省庁横断的な対応を求めています。

さて、今回の新型コロナウイルス感染症に有効なワクチン開発について現在、日本では国産ワクチン開発に着手し臨床試験に入っている製薬企業は四社あります。これらを取り巻く世界のワクチン開発の現状はどのようなになっているのでしょうか。ワクチンが実際に国民に接種さ



れるには、緊急使用許可を含む政府の「承認」が必要です。この政府承認に至るプロセスの一番手前には、研究・開発段階の「前臨床段階」があり、次の「臨床試験」に入るとフェーズ一〜三を経て、「申請」、「承認」と段階を追うこととなります。臨床試験のフェーズ一〜三のそれぞれの階層の間に、P一〜二（フェーズ一と二の間）とP二〜三（フェーズ二と三の間）があります。

更なる危機に備え、 国家の基礎体力を養う

日本の製薬メーカーのトップを走るのが、大阪のバイオベンチャー企業のアンジエスです。大阪大学と共同開発しているのは、人工的に合成したウイルスの遺伝子を投与するDNAワクチンで、現在、国内P二〜三試験を実施中です。これに続いてるのが、塩野義製薬の組換えたんぱくワクチンで、昨年十二月からP一〜二試験を行っています。さらに今年三月からP一〜二試験を始めているのが、第一三共のmRNAワクチンとKMバイオロジクスの不活化ワクチンです。mRNAワクチンは、既に日本でも承認されているファイザー社製ワクチンと同種のワクチンで、ウイルスの表面にあるスパイクたんぱく質を作るための遺伝子情報を伝達する物質「mRNA」を使ったワクチンであり、不活化ワクチンはウイルスそのものを処理して毒性をなくしたワクチンです。前

者が最先端の遺伝子ワクチンであるのに対して、後者はもともと旧来のワクチンだと言えます。

なります。

これ以外にもウイルスベクターワクチンがあります。これは英国のアストラゼネカ社がオックスフォード大学と共同開発したワクチンと同種のワクチンで、ウイルスの遺伝子の一部を別のウイルスに組み込んで投与するワクチンです。このように、伝統的とも言える「不活化ワクチン」に加え、「組み換えたんぱくワクチン」、「ウイルスベクターワクチン」、「DNAワクチン」、「mRNAワクチン」といった四つの遺伝子ワクチンが今回の新型コロナウイルス感染症に対抗するワクチンとして世界中で開発されており、日本でも以上の四社が既に臨床試験に入っているという事です。これが意味するところは大きく、今後、変異ウイルスが感染拡大した場合に、国内開発・製造ワクチンが存在していることで、改良ワクチンの製造が迅速に行なえる基礎体力を日本も獲得することになります。

日本は今回の新型コロナウイルス感染症に対して、社会的介入と国民皆保険制度を基盤とする全国一律にだれもが受診できる医療体制、そして高い公衆衛生意識と環境によってこれまでコロナ禍を凌いできました。しかし、疫病や感染症に対する備えという意味では、自然災害と同様の危機意識が低かったために、国産ウイルス開発で世界から遅れをとったことが最大の反省点です。次に同様の、もしくは今回以上に深刻な感染症が発生した時には、世界に先駆けてワクチン開発・製造に着手し、まず自国民（私と私の一家）を守り、世界に貢献することができるようになっていきたいものです。

どうかあなたの民を疫病に渡さないで下さい。

「あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。」（エレミア二九・12）